

Japanese Literature — 42



井上光晴
島尾敏雄
集



現代日本の文学

42

島尾敏雄集
井上光晴

伊藤 整 (監修委員)
井上 靖
川端 康成
三島由紀夫
足立 卷一 (編集委員)
奥野 健男
尾崎 秀樹
北 杜夫
(五十音順)

学習研究社

現代日本の文学

42

島尾敏雄集
井上光晴

全50巻
分割払価格 39,000円
現金価格 35,500円

昭和46年1月1日 初版発行
昭和48年5月1日 九版発行

著者 島尾敏雄
井上光晴

発行者 古岡秀人

発行所 株式会社
学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5
郵便番号 145 振替東京142930
電話 東京(720)1111 (大代表)

印刷 大日本印刷株式会社
暁印刷株式会社

製本 株式会社国栄社

本文用紙 三菱製紙株式会社

表紙クロス 東洋クロス株式会社

製函 日本紙パルプ商事株式会社

*この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、
文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)学研
「ユーザー・サービス本部事務局」現代日本の文学係へ
電話は、東京(03)720-1111 内線352,353か、東京(03)
727-1600へお願いします。

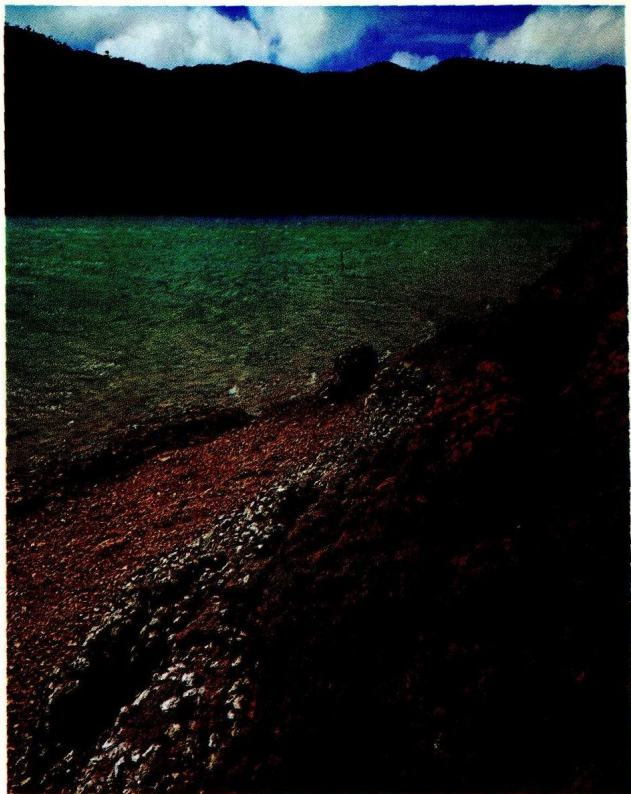
島尾敏雄文学紀行

カイツギキ カケ
奄美大島(皆津崎)より加計
ロマ アンキヤバ
呂麻島(安脚場)を眺望する



海峡口の方は遠くかすんだ辺りになるわけだが、位置の加減で、外洋に開けているように思えない。両方の島の岬の鼻が重なって海峡の出口が閉ざされているようだ。海峡が大きな湖のようでもある。

〔徳之島航海記〕



上 部隊の敷地には大島海峡から折れ釘^{くぎ}のように入り込んだ一つの入江全体が当てられていた。その入江は土地の発音でヌンミュラというふうに聞かれたが海図には呑ノ浦^{ノミ}という字が当ててある。 (「徳之島航海記」)

加計呂麻島 呑ノ浦の入江

左 トンバラ岩も通り過ぎた。近寄ってみれば、ごく当り前の岩礁^{いわしほ}に過ぎないのに、距離を置いて見た時に、何故あのように、紫がかった薄い赤ちゃけた、まるで蟹気楼^{かにきろう}のように、たよりなく、薄気味悪く見えただろう。

徳之島^{カナミサキ}見崎からトンバラ岩を望む(「徳之島航海記」)





奄美は群島と呼ばれているように、いくつかの離島のグループを呼ぶ名だ。人の住む島の名をあげると、大^カ島、加^ケ計^ロ呂^マ麻^ウ島、請^ウ島、与^ヨ路^ロ島、喜^キ界^{カイ}島、徳^{トク}之^ノ島、沖^{オキ}永^ノ良^{エラ}部^ア島、与^ヨ論^{ロン}島の八島である。……

奄美の特色は、まずその地帯が亜熱帯圏に属することだろう。……

また本土では見ることができぬ隆起珊瑚礁^{サンゴ礁}の島々の景観が南太平洋上の異国の島への連想を誘っているようだ。（「島にて」）

(右)奄美大島 アヤマル岬に群生するソテツ (左上)アヤマル岬のサンゴ礁の海

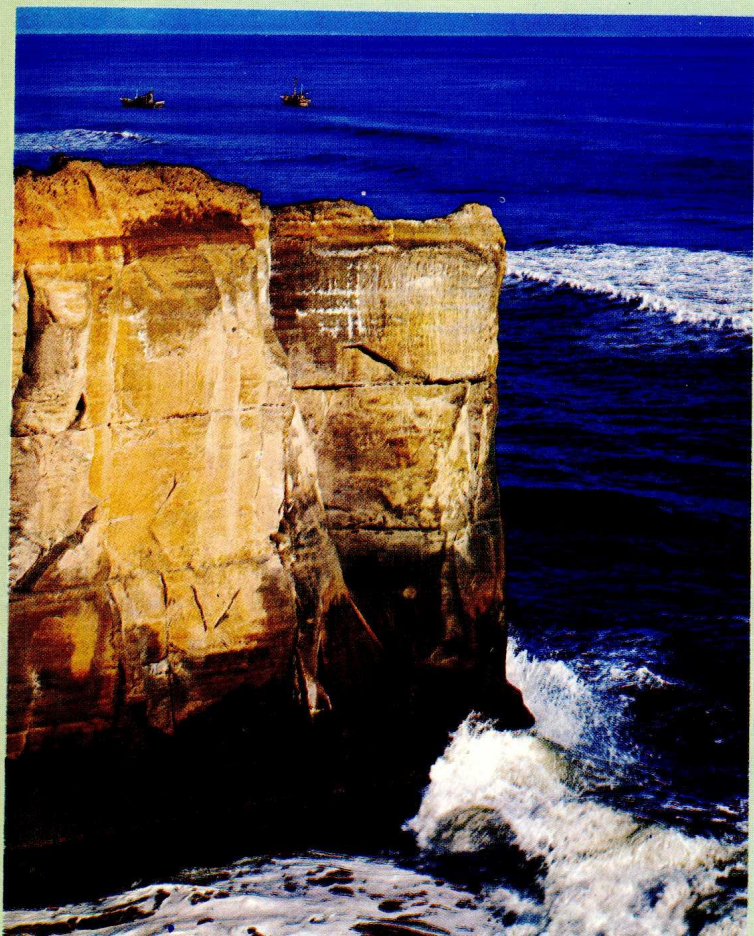
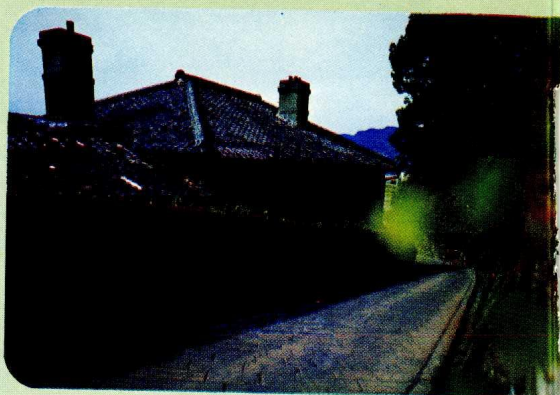


十三号艇が亀津泊地にはいったのは夕暮時であった。そして私はむざんな風景を見た。突堤は所々崩れ、機帆船が一隻沈みかけたまま放棄されていた。その上泊地の奥の部落が、空襲のためにすっかり焼払われていた。余燼がくすぶっているのではないかと思われる程、まだなまなましい焼跡であった。 (「徳之島航海記」)

(左)徳之島 亀津の部落 島尾隊長は艇隊員とこの亀津に一泊した
(右上)徳之島 亀徳港 現在では連絡船はこの港に着く



右 長崎・オランダ坂 この近
 辺は外人の元居留地で木造洋館
 がまだ残っている（「断崖館」）
 下 福島 村上から^{ツノボ}角部内^{ノチ}に至
 る海岸 「そこは、はたてであ
 った。小さな丘が海の真上でぶ
 ち切れていた。丘の鼻は日に日
 に風雨や波濤に^喰蝕され、真新
 しい崖肌をあらわにして、そそ
 けだっていた」（「いなかぶり」）

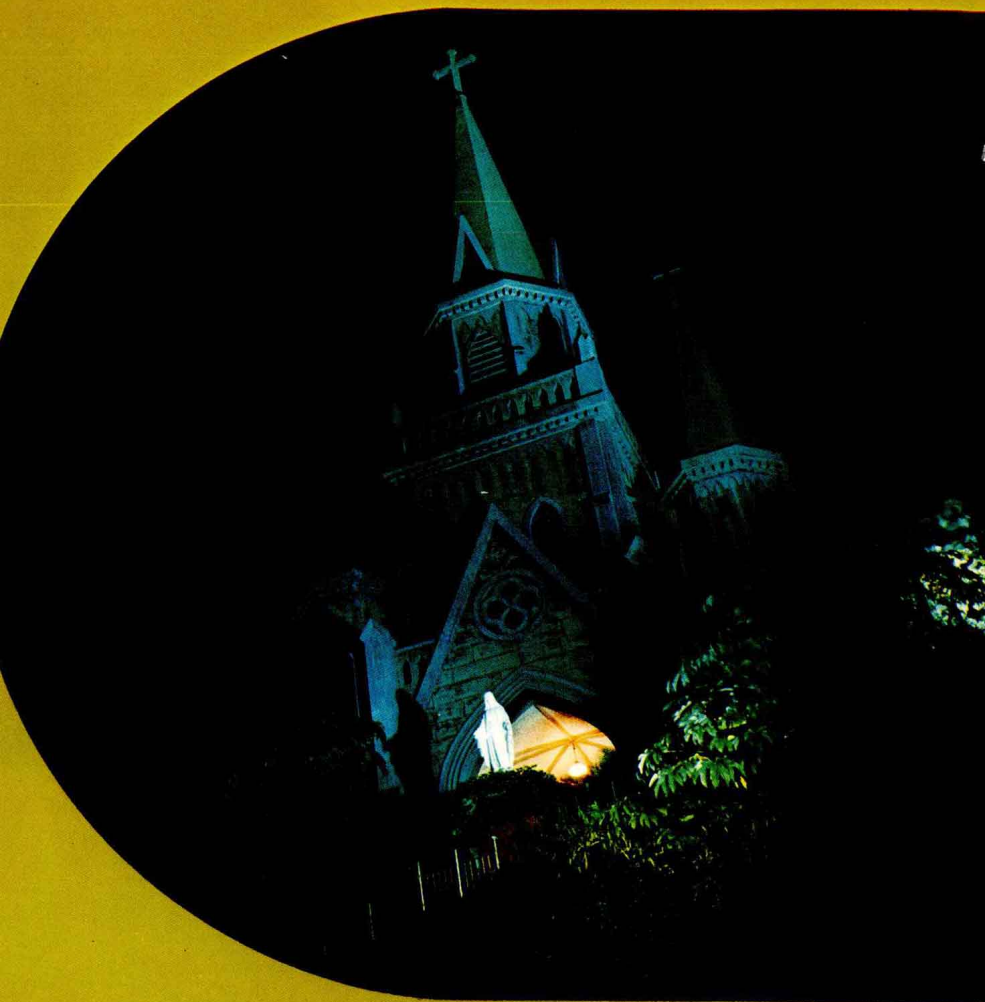


右 長崎 南山手にある大浦天主堂の尖塔^{尖塔}がはるかに見える。こ
 の付近は「単独旅行者」「^閑学生」などに克明に描かれている

平戸
月下の平戸瀬戸

平戸の瀬戸の渦潮が、地球の舞台の奈落のろくろ台のように、こっそり月の世界としめし合わせて、人間の知らない所で、舞台を廻しているような、ねたましさのようなものを感じた。（「月下の渦潮」）





駅前教会の十字架が黒いクレパス画のように仲代庫男の眼中で揺れ、彼はその思いを言葉にした。「あの教会は何か揺れとるごたるね」……仲代庫男は黒い尖塔からさらに眼を星のない夜空に転じていった。

(「虚構のクレーン」)

崎戸炭鉱と井上光晴

「わたしは少年時代、崎戸炭鉱の「納屋」に住み、太平洋戦争の勃発の前後、二坑の繰込炭礼係として働いていた。いわば、わたしにとっては忘れられがたい故郷である」。そしてこの故郷は彼にとってまた「文学の故郷」でもある。ここを舞台にし、モチーフにした作品は数多くあるが、中でも「飢える故郷」「長靴島」「トロッコと海鳥」「虚構のクレーン」「妊婦たちの明日」などは代表的なもので、いずれもS海底炭鉱とか長靴島、戸島海底炭鉱などの名で登場する。

「波と石炭と暖竹」の島・崎戸炭鉱は、現在では全島廃鉱になっているが、今でも彼は「火を吹くコースを求めて」帰郷する。そして、ガレキの山の廃墟に佇むとき過去の地獄のような重苦しい日々がまるできのうのように、手にとって見えるという。崎戸炭鉱は消えた。しかし彼の中に島は永遠によみがえり、生き続け、その文学の中に開花していく。

「島」という詩の一節で次のようにうたっている――

壊滅しないものがあるだろう

闘う風が

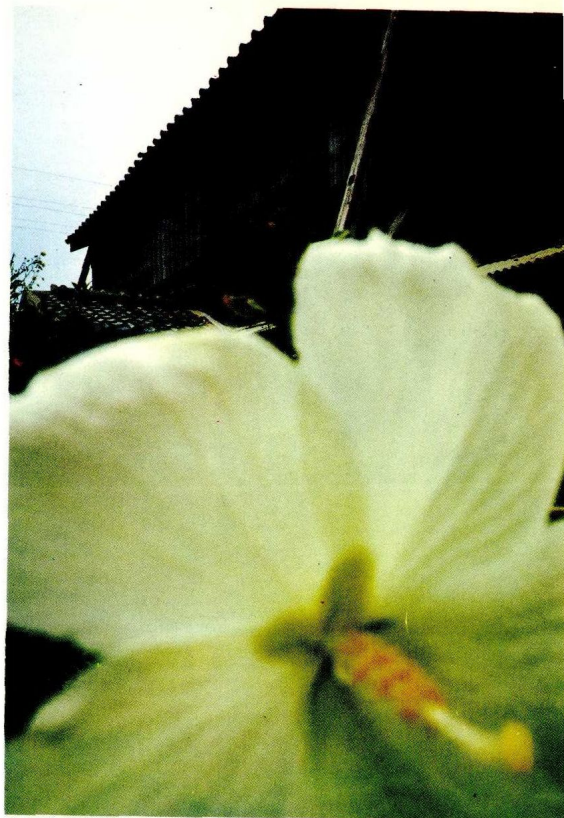
星の光りのない夜が

あの黄色い海のほとりに

憎しみをこめた泥炭が

百尺も火を吹きあげる

そういう島があるだろう



長崎県崎戸炭鉱の炭鉱住宅(上)

閉山後住む人も、訪う人もない廃屋のかたわらに、一輪の白い花が淋しく咲いていた

崎戸炭鉱の廃墟(二坑跡)(左)

かつての繁栄を物語るものは何もない。まさに「夢の跡」だ





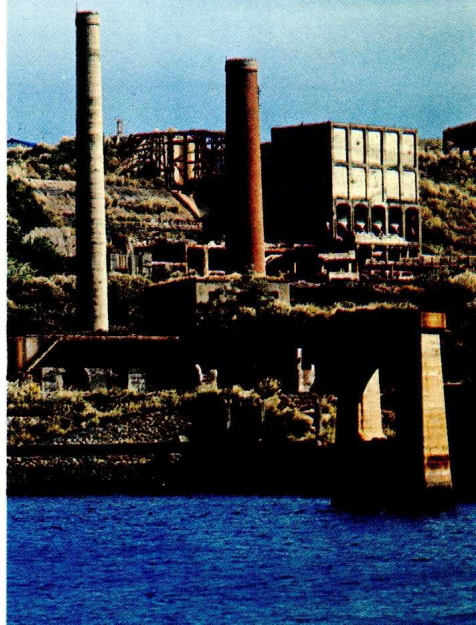
佐世保港と崎戸炭鉱

弓張岳より一望した佐世保港の
全景（「重いS港」）（上）

崎戸炭鉱 今は無用の長物と化
した煙突も何か淋しげだ（右）

「妊婦たちの明日」に出てくる四
階建ての炭住アパート（左）

崎戸炭鉱船着場 橋が出来る以
前はここから渡しが出た（左端）





右 佐世保(福石)刑務所

(「虚構のクレール」)

右下「八月九日は僕も長崎にいたんですが、僕はその時ちようど螢茶屋へいぢやの下宿にいましたからね、助かったんです」 (「地の群れ」)

長崎 螢茶屋電停前

